

不登校生徒の信頼感に関する研究

岐阜県大垣市立北中学校 教諭 橋渡 和明
岐阜大学教育学部 学校教育講座(心理学) 別府 哲

A Study of Trust for Non-Attendance Junior high School Students

Kazuaki HASHIDO

Ogaki Kita junior high school, Yashima, Ogaki 503-0016

Satoshi BEPPU

Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-1193

The purpose of the present study was to clarify the sense of trust of non-attendance junior high school students and to obtain implications for counseling. 417 junior high school students and 38 non-attendance students completed the trust scale (Amagai, 1995a), the school adjustment scale (Naitou et al., 1987) and the supportive feelings scale (Amagai, 1997a)

The results were as follows; (1) Gender differences were found in trust for others. Furthermore, the differences of school grade was significant in trust for self and trust for others. (2) Non-attendance students were lower level than junior high school students in trust. Moreover, non-attendance students were lowest level in trust for self. (3) Non-attendance students were higher level than junior high school students in supportive feelings from teachers.

Key words: non-attendance, trust, school adjustment, supportive feelings

キーワード：不登校, 信頼感, 学校環境適応感, サポート感

1. 問題

わが国の学校基本調査(文部科学省, 2001)によると2000年度中に30日以上小中学校を欠席した不登校の児童生徒は, 前年度に比べて3.1%増加し, 調査を開始して以来最多の約13万4千人に達していることがわかった。このように不登校が大きな社会問題となっているが, 社会の変化に人間の生き方を合わせるような現代社会では, 何を信じていけばよいのか青年期前期・思春期にある中学生も混乱している。これは, 河合(1999)が述べているように「文化の病」であるとも言えるであろうし, Erikson(1959)のいう, 青年期の「自我同一性」の確立の問題とも思える。

この青年期についてErikson(1959)は, 自分が自分であると感じる自分に比べて, 他人の目に自分がどう映るか, また青年期以前に育成

された役割や技術を, その時代の理想的な標準型にどう結びつけるか, といった問題に時には病的に, 時には奇妙に見えるほどとらわれてしまっている。鑑(1990)は, このように自我同一性の確立に苦しむ青年期の姿を, 自分で自分になることを懸命に回避しているのであると述べている。そして鑑(1990)は, 青年期という時期が「自分はどうしていいのかわからない」「何で学校へ行っているのだろう」「自分は何のために生きているのだろう」といった深刻な問題を, 思春期・青年期にある人や親, 教師に問いかけていると述べている。

この自我同一性の確立に影響を及ぼすものとして天貝(1995a)は信頼感をあげている。現代社会の中で, 人間ひとりひとりが「人や自分自身を安心して信じ, 頼ることができるという気

持ち(天貝, 1999)をもつことは、自尊感情を育て、さらに一貫した自己概念である自我同一性の確立を助け、人間の健全な発達を促進すると述べている。

Erikson(1959)は、乳児期に獲得される基本的信頼(basic trust)が、青年期においてより時間展望性をもつものとなり、自らの人生を統合するものとなることを述べているが、このことについて天貝(1995a)は、信頼感が生涯に渡って変容していくものであることを示しているとしている。また、天貝(1995a)は、信頼感とは、他人への信頼と自分への信頼の2つの方向性を持つことを指摘している。

また、Rotter(1967)は、対人的信頼感(interpersonal trust)をErikson(1953)の基本的信頼という概念に基づいているものとして、個人あるいは集団が、他の個人や集団の用いた言語・約束・話し言葉や書き言葉によって表された陳述に対し、それに頼ることが可能であるとする期待であると定義し、さらに人を信用できるだろうという期待は家族のよりよい信頼関係と子供の健康な人格の発達において重要な変数になっていると述べている。

天貝(1995a)は以上のような信頼感の概念をもとにしながらも、Rotter(1967)の対人的信頼感の定義が単次元で仮定されているにもかかわらず、Kaplan(1973)によって複数次元の存在が指摘されていることや、Rotenberg(1990)によってその構造が各発達段階において異なることが示されていることなどから、現在を基準にした信頼感を多次元的に測定する尺度を作成した。それは信頼感の否定的な側面である「不信」と、肯定的な側面である「自分への信頼」「他人への信頼」という3つの側面を持つものである。天貝(1995a)は、信頼感というのは自分あるいは他人(他の対象)に対して抱く信頼できるという気持ちのことであると定義した。そして天貝(1995a)は、信頼感とは自分自身の能力や他人の存在の一貫性についての確信であり、個人の安定したパーソナリティの発達と密接に結びついていると述べている。

また天貝・杉原(1997)は信頼感と学校環境適応感の関係を検討し、正の相関があることを得

ている。そして中学生において信頼感とは、おもに友人や教師といった対人的人間関係を通じて自己存在を位置づける役割を果たすのに対し、高校生における信頼感とは進路選択といった自己決定場面での適応感や安全感として機能するようになることを示すとも考えられると述べている。つまり天貝・杉原(1997)は、信頼感とは中学生から高校生になるにつれて対人面での適応感との関連から自己の内面的な適応感との関連へと移り変わるとしている。

一方、天貝(1997a)は成人期から老年期に目を向け、信頼感の発達を人間の生涯において考えると共に、家族や友人からのサポート感との関係を探っている。この中で成人期以降は、家族及び友人からのサポート感とは、特に「他人への信頼」に対して有意な正の影響を及ぼすと述べている。

ところで、信頼感において不登校の生徒は通常の生徒と比較してどのように違うのだろうか。このような生徒たちは、仲間関係がうまくいかないこと、あるいは学校へ行くことができないことで自分への信頼を喪失していることが予想される。したがって不登校生徒の信頼感を捉えることは、学校教育の中に存在する不登校生徒およびその潜在群に対する関わりの方角を得られるのではないかと思う。信頼感が生涯に渡って変容していくのであれば、この信頼感を高めるための援助を不登校生徒にしていけば、自我同一性の確立を促進するのではないだろうか。さらに、学校環境適応感あるいは、身近な他者からのサポート感が信頼感に及ぼす影響を検討することは、不登校生徒への援助を検討する上で必要になってくるだろう。また、こういった不登校生徒を信頼感という側面から検討した研究は少ない。

以上のことから不登校生徒の信頼感の特徴をとらえ、不登校生徒の指導の在り方についての示唆を得ることを研究の目的とする。

2. 方法

被験者

岐阜県M市A中学校1年生～3年生の通常に登校している生徒417名(男子216名、女子201

名) , およびM市とN市の中学生で自分の在籍する学校内の相談室または保健室に登校している生徒と, M市の不登校生徒のための適応指導教室に通級している中学生の合計38名(男子15名, 女子23名)。なお, このうちの6名はA中学校の生徒である。

調査時期

2000年9月~10月。

尺度について

信頼感尺度(天貝, 1995a)は24項目, 「とてもそう思う(4点)」「少しそう思う(3点)」「あまり思わない(2点)」「まったく思わない(1点)」の4件法で行なった。

学校環境適応感尺度(内藤・浅川・高瀬・古川・小泉, 1987)は36項目, 「とてもそう思う(4点)」「少しそう思う(3点)」「あまり思わない(2点)」「まったく思わない(1点)」の4件法で行なった。ただし, 相談室登校, 保健室登校, 適応指導教室通級の生徒には実施しなかった。

サポート感尺度(天貝, 1997a)は15項目で, 「とてもそう思う(4点)」「少しそう思う(3点)」「あまり思わない(2点)」「まったく思わない(1点)」の4件法で行なった。これは天貝(1997a)がサポート感測定項目として作成したもので, 現在の家族からのサポート感測定項目, 過去における家族からのサポート感測定項目, 友人からのサポート感測定項目からなる。例えば“家族とよく話しますか” “頼りになるのは家族だと思いますか” という現在の家族からのサポート感測定項目を過去形にしたものが過去における家族からのサポート感測定項目であり, 主語を友人にしたものが友人からのサポート感測定項目である。それぞれ5項目からなる。天貝(1997)は, 因子分析を行ない, 3因子構造を示したとしている。

本研究では主語を先生, 家族, 友人として, 先生からのサポート感測定項目(先生サポート), 家族からのサポート感測定項目(家族サポート), 友人からのサポート感測定項目(友人サポート)というように一部改編している。

手続き

この調査は, その質問内容の性質上, 特に不登校生徒については慎重におこなう必要がある

と判断した。したがって, まず各中学校長, 適応指導教室責任者に趣旨を説明し, 相談室登校, 保健室登校, 適応指導教室通級の生徒については各中学校, 各適応指導教室の判断でアンケート調査が可能な生徒に限って行なうように依頼した。

通常に登校している生徒については, 授業時間内に学級ごとに, 担任教師によって一斉に実施された。また, 相談室登校, 保健室登校, 適応指導教室通級の生徒については各校および適応指導教室の相談員によって, 個別または数名同時に行なわれた。

なお, 調査は無記名で行なわれたが, アンケート調査後の事例検討のために, 相談室登校などの生徒のみ, 回収後, 相談員, 養護教諭らによって記名が行なわれた。

3. 結果

信頼感について

本研究で用いた信頼感尺度は, 天貝(1995a)によって青年期以降における信頼感に関する理論的考察をもとに作成されたものである。そこで本研究でも先行研究と同様の因子がみられるかどうか検討するために, 信頼感尺度24項目について因子分析を行なった。方法として固有値1.0以上という基準で因子抽出を打ち切る主成分法を用い, Varimax回転を行なった。その結果, 本研究においても天貝(1995a)の高校生で得られた結果と内容的にほぼ同様の3因子構造が示された(表1)。そこで天貝(1995a)の先行研究にならい, 第1因子を信頼感の否定的な側面を表すものとして「不信」因子, 第2因子を自分への信頼を表すものとして「自分への信頼(対自信頼)」因子, 第3因子を他人への信頼を表すものとして「他人への信頼(対他信頼)」因子と命名した。

このように最終的に, 第1因子として「不信」8項目, 第2因子「自分への信頼」8項目, 第3因子「他人への信頼」5項目の合計3因子, 21項目を抽出したので, 各質問項目得点の合計を以って各下位尺度得点とし, 全質問項目得点の合計を以って信頼感尺度得点とした。なお, 信頼感尺度得点においては, 得点の高いほうが

表1 信頼感尺度項目 因子分析結果 (Varimax回転後)

因子	NO	質問項目	F1	F2	F3	共通性
不信	22	前に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。	.628	-.195	-.066	.469
	15	今は何かと話しができて、他人など全く当てにならないものである。	.614	.010	-.197	.450
	19	私はなぜか人に対して疑い深くなってしまった。	.608	-.094	.008	.394
	8	けっきょく、まわりは敵ばかりだと感じる。	.555	-.186	-.394	.520
	17	気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。	.492	.023	-.230	.301
	13	人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。	.490	-.072	-.108	.278
	5	今は心から頼れる人であっても、いつか裏切られるかもしれないと思う。	.476	-.046	-.289	.370
	11	相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手が得をするからだと思う。	.366	.131	-.054	.213
自分への信頼	18	私は、自分自身が信頼されるねうちがある人間だと思う。	-.059	.710	.158	.553
	9	まわりのほとんどの人は、私を信頼してくれるだろう。	-.264	.628	.317	.568
	16	私は、自分自身をある程度は信頼できる。	-.111	.514	.199	.365
	24	私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができると思っている。	.009	.466	.086	.254
	12	私は自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする。	-.105	.426	.339	.342
	14	私は私で、決して他人にはとってかわることのできない存在であると思う。	.078	.403	.166	.198
	10	自分自身について、今は実現しないことでも、いつかはできるだろうと信じられることは多い。	-.075	.385	.273	.326
	20	ふつう人間は信頼できるものだと思う。	-.358	.385	.288	.480
他人への信頼	3	私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。	-.174	.348	.693	.658
	2	無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。	-.110	.374	.598	.517
	7	私は現在、信頼できる決まった友人がいる。	-.192	.222	.567	.417
	4	これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。	-.343	.283	.474	.437
	1	これまで出会ったほとんどの人は私によくしてくれた。	-.229	.220	.461	.320
二乗和			2.930	2.647	2.530	8.107
寄与率 (%)			12.21	10.54	11.03	33.78

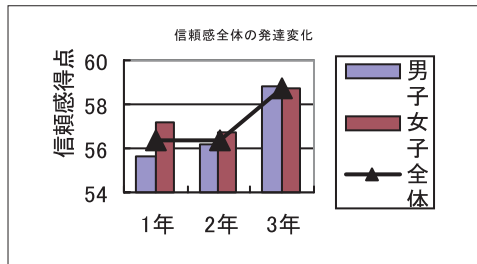


図1 信頼感の学生差および性差

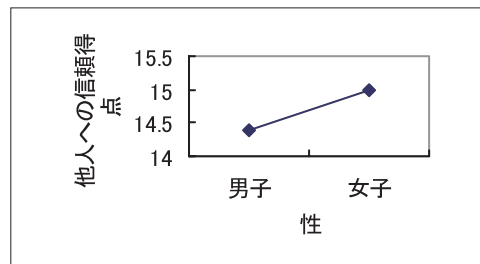


図4 「他人への信頼」得点の性差

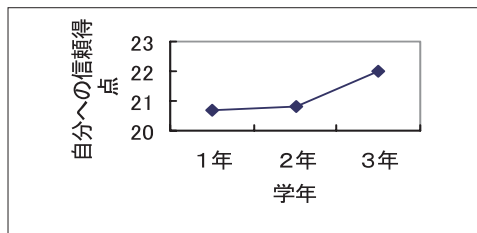


図2 「自分への信頼」得点の学年差

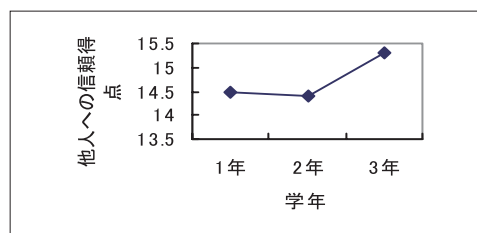


図3 「他人への信頼」得点の学年差

表2 不登校生徒と通常に渡航している生徒の信頼感尺度得点の比較

	Mean (S.D.)		t値
	通常の生徒 N=417	不登校生徒 N=38	
信頼感	57.326 (9.005)	50.421 (9.508)	4.504**
不信	18.532 (4.394)	21.553 (4.458)	-4.052**
自分への信頼	21.178 (4.015)	16.263 (3.462)	7.301**
他人への信頼	14.684 (2.883)	13.158 (3.268)	3.087**

信頼感が高くなるようにするため、「不信」についての項目は逆転項目として扱った。

次に信頼感とその下位尺度である3因子を目的変数とし、学年および性を説明変数として2要因の分散分析を行なったところ、信頼感尺度

得点(図1)では学年差・性差ともに有意ではなかった。しかし「自分への信頼」得点($F(2, 411)=4.369$ $p < .05$)と「他人への信頼」得点($F(2, 411)=4.115$ $p < .05$)において学年差で有意差がみられ、多重比較の結果、いずれも1・2年

表3 学校適応感尺度 因子分析結果(Varimax回転後)

因子	NO	項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
進路意識	4	自分の進路や将来について目標をはっきりと持っている。	.751	.126	.014	.123	.023	.072	.602
	31	自分にあった進路を考えている。	.747	.087	.064	.113	.205	.131	.642
	14	進路のことを真剣に考えている。	.740	.110	.226	.042	.192	.089	.657
	28	自分の将来に希望を持っている。	.729	.081	.034	.303	.126	.103	.658
	19	将来になりたい職業を決めている。	.728	.049	-.062	.200	-.028	.038	.579
	23	自分の進路について、何かで調べるなどしている。	.594	.263	-.008	.043	.164	.084	.457
教師関係	35	先生と話す機会を持とうとしている。	.122	.692	.126	.035	.201	.250	.614
	16	なんでも相談できる先生がいる。	.130	.662	.152	.115	.112	.112	.517
	8	友達のように親しみを感じる先生がいる。	.129	.644	.098	.155	.138	.145	.505
	1	先生と気軽に話すことができる。	.132	.613	.088	.204	.080	.083	.456
	25	自分の学校の先生を信頼している。	.026	.597	.427	.100	.072	.124	.571
	11	自分の学校の先生に対して素直である。	.058	.594	.355	.239	.152	.082	.569
	32	先生によく質問する。	.173	.524	.066	.091	.290	.065	.406
規則態度	17	規則を守ろうという自覚を持っている。	.085	.092	.758	-.031	.204	.199	.673
	13	意識しなくても規則を守れる方だ。	.045	.116	.717	-.017	.283	.141	.631
	2	学校の規則を真面目に守っている。	-.060	.107	.680	-.014	.151	.158	.525
	7	学校の規則は当たり前だと思う。	.0004	.224	.649	-.109	.257	.105	.560
	22	学校の規則に対して不満はない。	.060	.162	.441	-.040	.110	.051	.240
友人関係	10	多くの友人を持っている。	-.001	.116	.046	.757	.123	.159	.629
	29	自分は人づきあいが上手である。	.122	.141	-.042	.703	.273	.077	.611
	15	性格的に明るい方である。	.134	.073	-.042	.628	.107	.106	.442
	20	自分はユーモアのある人間である。	.182	.136	-.059	.607	.223	.085	.480
	5	悩みを話すことのできる友人がいる。	.255	.207	-.015	.571	-.054	.053	.440
	24	楽しい友人を持っている。	.111	.078	.009	.541	-.099	.201	.361
学習意欲	12	勉強に積極的である。	.115	.143	.333	.161	.692	.077	.655
	26	ある程度勉強ができるほうだ。	.032	.127	.186	.061	.652	.140	.500
	33	勉強が楽しいと思う。	.194	.235	.172	-.004	.614	.162	.525
	21	授業をよく理解できている。	.109	.135	.219	.120	.581	.208	.473
	30	家庭学習を毎日時間を決めてやっている。	.120	.169	.221	.157	.500	.097	.376
	6	勉強の目標を持って努力している。	.246	.203	.318	.188	.473	.129	.478
	36	部活動や委員会活動をなまけない。	.065	.143	.195	.101	.153	.644	.511
特別活動	34	部活動に所属し、充実感を持っている。	.014	.094	.015	.102	.088	.640	.437
	3	部活動や行事、学級活動、委員会活動などに積極的である。	.141	.120	.255	.230	.199	.637	.597
	18	部活動や行事、学級活動、委員会活動が楽しい。	.203	.187	.179	.171	.080	.612	.519
	27	学級活動や行事に、自主的に参加している。	.169	.185	.245	.197	.297	.470	.471
	9	学級や学校行事には協力している。	.143	.236	.354	.242	.185	.390	.446
	二乗和			3.597	3.370	3.300	3.087	2.992	2.468
寄与率 (%)			9.992	9.362	9.167	8.576	8.311	6.857	52.27

生より3年生が高かった(図2, 3)。また性差が「他人への信頼」得点 (F(1, 411)=5.180 p<.05)においてみられ、女子のほうが高かった(図4)。

不登校生徒の信頼感について

不登校生徒と通常に登校している生徒の信頼感をt検定で比較したところ、不登校生徒は、信頼感尺度得点、および「不信」「自分への信頼」「他人への信頼」の3つの下位尺度得点において有意な差がみられた(表2)。信頼感のいずれの下位尺度得点も、不登校生徒の方が通常に登校としている生徒より低いことが示された。

学校環境適応感について

本研究で用いた学校環境適応感尺度は、高校生における学校環境適応感について検討され、作成されたものである(内藤ら, 1987)。そして、天貝・杉原(1997)は中学生にも適応し、信頼感との関係を検討している。本研究でも、先行研究(内藤ら, 1987)と同じ因子が得られるかについて検討するために、学校環境適応感尺度36項目について因子分析を行なった。方法として、固有値1.0以上という基準で因子抽出を打ち切る主成分法を用い、Varimax回転を行なった。

その結果、先行研究(内藤ら, 1987)とほぼ同様の6因子構造が得られた(表3)。そこで先行研究(内藤ら, 1987)を参考に第1因子を進路への意識に関するものとして「進路意識」因子、第2因子を教師との関係を示すものとして「教師関係」因子、第3因子を規則に対する態度に関するものとして「規則態度」因子、第4因子を友人との関係を示すものとして「友人関係」因子、第5因子を学習に対する意欲に関するものとして「学習意欲」因子、第6因子を特別活動への意識に関するものとして「特別活動」因子と命名した。そこで、これら各質問項目得点の合計値を以って学校環境適応感の各下位尺度得点とし、全質問項目得点の合計値を以って学校環境適応感尺度得点としている。なお、得点が高いほうが学校環境適応感が高くなるようにしている。

次に信頼感尺度得点と学校環境適応感においてピアソンの相関係数を求めたところ、正の有

意な相関があった(r=.554 N=417, p<.01)。そして、信頼感を目的変数、学校環境適応感を説明変数として重回帰分析を行なった。その結果(表4)、友人関係($\beta=.542$ p<.01)および特別活動($\beta=.242$ p<.01)が信頼感に有意な影響を及ぼしていた($R^2=.479$ p<.01)。

表4 信頼感を目的変数、学校環境適応感を説明変数とする重回帰分析 (標準偏向回帰係数: β)

	信頼感 全体	不信	自分への 信頼	他人への 信頼
進路意識	-.077	.251**	.106*	.002
教師関係	.008	-.023	-.032	.023
規則態度	.061	.009	.112*	.054
友人関係	.542**	-.363**	.414**	.566**
学習意欲	.066	.031	.165**	.028
特別活動	.242**	-.218**	.171**	.187**
説明率:R ²	.479**	.187**	.449**	.481**

(**p<.01, *p<.05)

信頼感における学校環境適応感群差

さらに、学校環境適応感の違いが信頼感の大きさとどう関係しているかみるために、通常に登校している生徒を学校環境適応感得点の高いほうから、人数がほぼ等しくなるように、高適応(H)群、適応(MH)群、不適応(ML)群、高不適応(L)群の4群に分け、そこに不登校(NA)群を加えたものを学校環境適応感群とし、信頼感尺度の質問項目毎について一要因の分散分析をおこなった(表4)。その結果、「不信」では“22.前に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている (F(450, 4)=3, 28 1 p<.01) ”, “8.けっきょく、まわりは敵ばかりだと感じる(F(450, 4)=3.777 p<.01) ”, “17.気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう(F(450, 4)=5.564 p<.01) ”の3項目で有意差がみられたので、それぞれHSD法による多重比較をおこなった。その結果、項目“22”では不登校(NA)群—適応(MH)群間および不登校(NA)群—高不適応(L)群間(p<.05)、不登校(NA)群—高適応(H)群間(p<.01)において有意差がみられた。項目“8”では不登校(NA)群—適応(MH)群間およ

び不登校(N A)群—不適応(M L)群間($p < .05$), 不登校(N A)群—高適応(H)群間($p < .01$)において有意差がみられた。項目“17”では不登校(N A)群—高適応(H)群間, 不登校(N A)群—不適応(M H)群間および不登校(N A)群—不適応(M L)群間($p < .01$)において有意差がみられた。このようにいずれも不登校(N A)群の得点が高かった。

「自分への信頼」では, “24.私は, 自分自身の行動をある程度はコントロールすることができると思っている($F(450, 4)=3.321 p < .05$)”, “12.私は自分の人生に対し, 何とかやっていけそうな気がする($F(450, 4)=3.260 p < .05$)”の2項目で有意差がみられたので, H S D法による多重比較をおこなった。その結果, 項目“24”は不登校(N A)群—高適応(H)群間($p < .01$)において有意差がみられた。項目“12”は不登校(N A)群—高適応(H)群間, 不登校(N A)群—不適応(M H)群間($p < .05$)において有意差がみられ, 不登校(N A)群の方が低かった。

「他人への信頼」では “3.私は多少のことであっても, 今の信頼関係を保っていけると思う($F(450, 4)=5.455 p < .01$)”, “2.無理をしなくてもこの先の人生でも, 私は信頼できる人と出会えるような気がする($F(450, 4)=4.434 p < .01$)”, “7.私は現在, 信頼できる決まった友人がいる($F(450, 4)=3.813 p < .01$)”の3項目で有意差がみられたのでH S D法による多重比較をおこなった。その結果, 項目“3”では不登校(N A)群—不適応(M L)群間, 不登校(N A)群—不適応(M H)群間および 不登校(N A)群—高適応(H)群間($p < .01$)において有意差がみられた。項目“2”では不登校(N A)群—不適応(M L)群間($p < .05$)および高適応(H)群間($p < .01$)において有意差がみられた。項目“7”では不登校(N A)群—高適応(H)群間($p < .01$)において有意差がみられ, いずれも不登校(N A)群の方が低かった。

サポート感について

また, 信頼感とサポート感においてピアソンの相関係数を求めたところ, 正の有意な相関があった($r=.688 N=417, p < .01$)。そして, 信頼感を目的変数, サポート感を説明変数として

重回帰分析を行なった。その結果(表5), 先生サポート($\beta=.100 p < .05$), 家族サポート($\beta=.170 p < .01$)および友人サポート($\beta=.585 p < .01$)はいずれも, 信頼感に有意な影響を及ぼすことがわかった($R^2=.459 p < .01$)。

不登校生徒のサポート感

さらに, 不登校生徒と通常に登校している生徒のサポート感をt検定で比較したところ, 先生サポートは不登校生徒のほうが有意に高く, 友人サポートは通常の生徒のほうが有意に高かった(表6)。

表5 信頼感を目的変数, サポート感を説明変数とする重回帰分析 (標準偏向回帰係数: β)

	信頼感全体	不信	自分への信頼	他人への信頼
先生サポート	.100*	-0.22	.125**	.098*
家族サポート	.170**	-.056	.246**	.111**
友人サポート	.585**	-.403**	.424**	.625**
説明率: R^2	.459**	.175**	.340**	.475**

(** $p < .01$. * $p < .05$)

表6 不登校生徒と通常に登校している生徒のサポート感尺度得点の比較

	平均値 (標準偏差)		t値
	通常の生徒 N=417	不登校生徒 N=38	
サポート感全体	38.811 (8.111)	39.579 (8.21)	-.559
先生サポート	9.921 (3.943)	11.974 (4.156)	-3.058**
家族サポート	13.319 (4.120)	14.263 (3.592)	-1.366
友人サポート	15.571 (3.369)	13.342 (3.443)	3.897**

(** $p < .01$. * $p < .05$)

信頼感におけるサポート感群および学校環境適応感群差

次にサポート感(天貝, 1997)得点の高低で高サポート(HS)群と低サポート(LS)群に分け, これと登・不登校群, 性を加えて説明変数とした。そして信頼感全体を目的変数として, 3要因の分散分析を行なった。その結果, 登・不登校群差 ($F(1, 447)=28.458 p < .01$) およびサポート

感群差(F(1, 447)=35.373 p<.01)は有意であり、不登校群、低サポート群で信頼感は低いという結果だった(図5)。なお、性差はみられなかった。

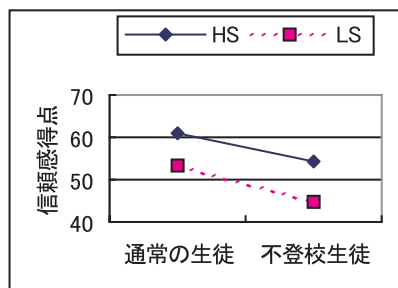


図5 信頼感におけるサポート感と登・不登校の差

また不登校生徒におけるサポートの効果をより詳細に捉えるために、サポート感群と学校環境適応感群とを説明変数とし、信頼感全体および3つの因子をそれぞれ目的変数として二要因の分散分析およびHSD法による多重比較を行なった。なお学校環境適応感群別とサポート感群別の人数を表7に示す。

表7 学校環境適応感群・サポート感群別人数

群	HS群	LS群	合計
H (高適応) 群	91	14	105
MH (適応) 群	69	35	104
ML (不適応) 群	39	65	104
L (高不適応) 群	16	88	104
NA (不登校) 群	22	16	38
	237	218	455

その結果(表8)、信頼感全体では学校環境適応感群では有意差がみられた(F(4, 445)=17.000 p<.01)。そこでHSD法による多重比較をおこなったところ、不登校(NA)群と高不適応(L)群のいずれも不適応(ML)群、適応(MH)群そして高適応(H)群より低かった(p<.01)。なお、不登校(NA)群—高不適応(L)群間は差がみとめられなかった。サポート感群でも有意差がみられ(F(1, 445)=34.941 p<.01)、サポート感高(HS)群の方が高かった。交互作用はなかった。

「不信」では学校環境適応感群では有意差がみられた(F(4, 445)=5.961 p<.01)。そこでHSD法による多重比較をおこなったところ、不登校

(NA)群は不適応(ML)群、適応(MH)群そして高適応(H)群より高かった(p<.01)。高不適応(L)群は適応(MH)群と高適応(H)群より高かった(p<.01)。なお、不登校(NA)群—高不適応(L)群間は差がみとめられなかった。サポート感群でも有意差がみられ(F(1, 445)=13.082 p<.01)、サポート感高(HS)群の方が低かった。交互作用はなかった。

「自分への信頼」では学校環境適応感群では有意差がみられた(F(4, 445)=34.846 p<.01)。そこでHSD法による多重比較をおこなったところ、不登校(NA)群は高不適応(L)群より低く(p<.05)、不適応(ML)群、適応(MH)群そして高適応(H)群とも低かった(p<.01)。高不適応(L)群は不適応(ML)群、適応(MH)群と高適応(H)群よりも低かった(p<.01)。サポート感群でも有意差がみられ(F(1, 445)=37.643 p<.01)、サポート感高(HS)群の方が高かった。交互作用は有意ではなかった。

「他人への信頼」では学校環境適応感群では有意差がみられた(F(4, 445)=15.649 p<.01)。そこでHSD法による多重比較をおこなったところ、不登校(NA)群は適応(MH)群そして高適応(H)群より低かった(p<.01)。高不適応(L)群は不適応(ML)群、適応(MH)群と高適応(H)群よりも低かった(p<.01)。サポート感群でも有意差がみられ(F(1, 445)=20.900 p<.01)、サポート感高(HS)群の方が高かった。交互作用は有意であったので(F(4, 445)=2.404 p<.05)、下位検定ならびにその多重比較をおこなった(表9)。すると、不登校(NA)群におけるサポート感群の効果は有意であり(F(1, 445)=9.252 p<.01)、サポート感高(HS)群の方が高かった。高適応(H)群、適応(MH)群、不適応(ML)群、高不適応(L)群の効果はそれぞれなかった。また、高サポート感(HS)群における学校環境適応感群差の効果は有意であり(F(4, 445)=2.791 p<.05)、多重比較の結果HS群では高適応(H)群の方が高不適応(L)群よりも高かった(p<.05)。低サポート感(LS)群における学校環境適応感群差の効果はなかった。

表8 信頼感における学校環境適応感群とサポート感群差の分散分析および多重比較

		信頼感全体		不信		自分への信頼		他人への信頼	
F 値	学校適応	17.900**		5.961**		34.846**		15.649**	
	サポート感	34.941** HS>LS		13.082** HS>LS		20.900** HS>LS		37.643** HS>LS	
	交互作用	1.507		.545		1.837		2.404*	
サポート感		HS	LS	HS	LS	HS	LS	HS	LS
群別平均値	H	63.780 (7.363)	58.357 (7.632)	17.615 (4.253)	19.071 (3.892)	24.637 (3.352)	22.214 (3.847)	16.758 (2.218)	15.214 (2.225)
	M	60.188 (5.027)	57.722 (7.829)	17.449 (3.160)	18.889 (4.671)	21.942 (2.583)	21.556 (2.980)	15.739 (1.633)	15.056 (2.756)
	H	59.026 (5.664)	54.062 (8.558)	16.949 (3.769)	19.508 (4.455)	21.077 (2.785)	19.985 (3.710)	14.821 (2.126)	13.615 (2.725)
	M	54.500 (10.12)	50.172 (9.039)	19.125 (4.544)	19.989 (4.976)	19.375 (3.981)	17.897 (3.564)	14.188 (3.229)	12.264 (2.717)
	L	54.500 (9.566)	44.813 (6.080)	20.364 (5.151)	23.188 (2.639)	17.727 (3.135)	14.250 (2.887)	14.636 (2.787)	11.125 (2.802)
	N								
多重比較	NA<(ML/MH/H)** L<(ML/MH/H)** ML<MH*, H** MH<H**		NA>(ML/MH/H)** L>MH*, H** ML<(H/NH)** MH<H**		NA<L*, (ML/MH/H)** L<(ML/MH/H)** ML<MH*, H** MH<H**		NA<(MH/H)** L<(ML/MH/H)** ML<(MH/H)** MH<H**		

(**p<.01, *p<.05)

表9 「他人への信頼」交互作用の下位検定

変動因	SS	df	MS	F	多重比較
H群におけるサポート感群の効果	20.571	1	20.571	3.424	
MH群におけるサポート感群の効果	4.025	1	4.0254	.670	
ML群におけるサポート感群の効果	12.550	1	12.550	2.089	
L群におけるサポート感群の効果	1.732	1	1.732	.288	
NA群におけるサポート感群の効果	55.584	1	55.584	9.252**	HS>LS*
HS群における学校環境適応感群の効果	67.068	4	16.767	2.791*	H>L*
LS群における学校環境適応感群の効果	53.714	4	13.429	2.235	
誤差	2673.558	445	6.008		

(**p<.01, *p<.05)

3. 考察

信頼感について

信頼感全体では、学年による違いはなかったが、「自分への信頼」と「他人への信頼」では1・2年生より3年生が高くなっていった。そして2年生女子では信頼感全体と「他人への信頼」で低くなる傾向が捉えられた。信頼感は中学校3年生で大きく発達するといえる。この点については杉原・天貝(1996)の現在及び未来の自分を信頼できるという気持ちは、青年期において、徐々に増加することや、他人への信頼は実際その時点で当人が対人関係において体験していること

を反映して変動し、青年期全体でみると増加しているという指摘と一致するものである。また、天貝(1995a)は信頼感に自己の積極的な希求や模索のエネルギー源といった形で、自我同一性獲得に影響を及ぼすと述べているが、中学生のような青年期前期では、信頼感の肯定的な側面である「自分への信頼」や「他人への信頼」を大きく成長させ、自我同一性の確立を促しているのだと考えられる。したがって、家庭・学校・社会が子ども達の信頼感の健全な発達を促進するようなものである必要がある。

不登校生徒の信頼感

不登校生徒の信頼感に通常に登校している生徒のそれと比較すると低いことが検証された。即ち、不登校生徒は通常に登校している生徒よりも「自分への信頼」「他人への信頼」については低く、「不信」においては高いことがわかった。天貝(1999)は信頼感の生涯発達を考える時、青年期は不信体験の克服から新たな信頼感を模索する時期であり、また自己信頼が確立してゆく重要な時期であると述べているが、不登校生徒の信頼感をみると、このような信頼感の健全な発達が妨げられていることがわかる。天貝(1999)は一般少年と非行少年を比較したところ、自分への信頼および他人への信頼という信頼感の肯定的な側面においては両群の間に差異はみられなかったという結果を得ており、ここから考えても不登校生徒の信頼感に危機的な状況になっていると考えられる。また天貝(1999)はこの時期の不信の過度の広がり、内閉化傾向など個人の精神的健康にとって否定的な影響をもたらすことが懸念されると指摘している。

さらに特記すべきなのは学校環境適応感群における不登校群(N A)群と高不適応(L)群とを比較した場合、「自分への信頼」得点でのみ、有意な差がみられたということである。これは、学校環境に対して高い不適応感を感じながらも学校に登校できている中学生と、不登校になっている生徒の信頼感における違いが、この「自分への信頼」において顕著にあらわれることを示唆している。このことは不登校生徒の信頼感が「自分への信頼」をもっとも大きな問題としてかかえていることを推察させる。したがって、

「学校へ行きたいけれど行けない。」と訴える生徒の場合は、学校へ行くことのできない自分自身を否定し、その結果、自分への信頼をさらに低くしているということが考えられるので、このような不登校生徒への援助が急務であると考えられる。また、不登校生徒は“前に誰かに裏切られたり、だまされたりした。”、“自分自信の行動をコントロールできない。”、“信頼できる決まった友人がいない。”などというように考えていることがわかった。天貝(1999)は自分への信頼が青年期を頂点として安定すると述べているが、この時期に不登校生徒において「自分への信頼」が低くなっていることは、青年期の心理的な発達から考えても大きな問題であろう。不登校生徒は、多くは引きこもりや相談室などへの登校をしており、生活空間がたいへん狭く、自分から積極的に活動して「自分への信頼」を獲得することは難しい。したがって、不登校生徒は、他者との関わりから「他人への信頼」をまず高め、それを大人から同世代の仲間から得られるように移行しながら、徐々に「自分への信頼」を生み出すような手立てを講じなくてはならないと考えられる。天貝(1999)も不信の緩和を促すこと、そして特定の他者への信頼を人一般および自分自身に対する信頼と結びつけるようにすることが重要であると述べており、「自分への信頼」を回復させることが不登校生徒を立ち直らせることになるのではないかと考えられる。この点については天貝(1999)が、自分への信頼には承認経験が影響力を持つと述べているが、「他人への信頼」を育て、「自分への信頼」につながる承認経験とはどんなことか考えなければならない。そして、“自分自身の行動をコントロールできない。”“自分の人生を何とかやっていけそうにない。”といったような「自分への信頼」の喪失感に対してどのように対処していけばよいか考えていきたい。また、“信頼できる決まった友人がいない。”という傾向は天貝(1999)による一般少年と非行少年を比較した研究においてはみられなかったもので、不登校生徒の特徴として考えられる。この“信頼できる決まった友人がいない。”といったことについては、「他人への信頼」から「自分

への信頼」につながるものとして教師らは十分に援助してやらなくてはならないと考えられる。

不登校生徒へのサポート

今まで述べてきたように不登校生徒の信頼感における特徴を十分に理解して指導にあたるのが肝要であり、どのようにしたら「自分への信頼」「他人への信頼」を高め、「不信」を緩和できるかということを探ることが必要であろう。そのひとつの鍵が信頼感を高めるはたらきのある他者からのサポートにあると考えられる。不登校生徒は、「先生サポート」において通常に登校している生徒よりも高く、「家族サポート」においては通常に登校している生徒と同じ程度であった。この点については、不登校生徒は家族や教師からのサポートが比較的多く、友人からのサポートは少ないという蒲田ら(1994)の先行研究と一致している。不登校生徒の「先生サポート」が通常の生徒よりも多く得ているということは、渡辺ら(1997)も同様に指摘しており、教師も不登校生徒の援助を進める上で重要な位置を占めているのではないだろうか。このように不登校生徒においては、教師や家族が信頼感を高める重要な位置を占めていると考えられるので「先生サポート」「家族サポート」そして、「友人サポート」へとサポート感を得ることができる対象を広げていく必要があると考えられる。

また、不登校の生徒において高サポートの生徒は低サポートの生徒よりも「他人への信頼」得点は高くなることがつかめた。即ち、不登校生徒に対してはサポート感を感じさせる対処をすることによって、信頼感を安定させることができるということではないだろうか。したがって、どのようにして大人から同世代の仲間へとサポート感を感じる対象を広げ、不登校生徒の信頼感を高めるかということについて研究しなければならないだろう。

信頼感からみた不登校の潜在群

学校環境適応感群における高不適応(L)群が、信頼感尺度得点、および「不信」得点、「他人への信頼」得点においては、不登校(N A)群と差がなかったことは、通常に登校している生徒の中にも危機的に信頼感が低い一群があるということがいえるだろう。即ち、この信頼感の低

い一群は不登校の潜在群とも考えられる。このことから学校現場においては、この不登校の潜在群が存在するという認識を認識して、教育活動を行っていく必要があるだろう。そして、これらの生徒に対しても、前述したように「他人への信頼」を高め、「自分への信頼」へとつなげていくような援助が重要であると考えられる。

ところで学校環境適応感尺度得点は信頼感尺度得点に有意な影響を及ぼしていた。これは、信頼感の形成の場としての学校の役割の重要性を示していると考えられる。特に「友人関係」や「特別活動」から得る信頼感は大きいと考えられるので、学校の教育活動の中に信頼感を培う視点を取り入れると共に、信頼感の形成を妨げるような要因を学校の中から取り除いていかなければならないと考えられる。こうすることで不登校の潜在群の信頼感を高めることになるであろう。

4. 成果と課題

天貝(1999)は、教師やカウンセラーなどの発達援助者は、まず、大人からの承認経験や受容経験を通じて信頼感を獲得かつ安定させ、最終的には自身による肯定的な信頼感機能の確立と活性化へ移行させることが重要であると述べているが、本研究では不登校生徒の場合は、「他人への信頼」を得る対象を教師や家族といった大人から同世代の仲間へ広げることや、「受容経験」や「承認経験」から創り出された「他人への信頼」をもとに「自分への信頼」を高めることが必要であることが得られた。これらのことができれば、“前に誰かに裏切られたり、だまされたりした。”といった「不信」につながる経験があってもそれを乗り越え、杉原・天貝(1996)にあるような信頼も不信も経験したが、それでも不信より信頼の方が強い状態へと信頼感に変容していくと考えられる。

今後は不登校生徒やその潜在群の信頼感を高める過程で、具体的にどのように大人から同世代の仲間へと関わりを広げていけばよいのか、また「他人への信頼」を高め、「自分への信頼」につながる「受容経験」や「承認経験」をどのように与えていくか、などについて明らかにしていく必要があるだろう。

参考文献

- 天貝由美子 1995a 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- 天貝由美子 1995b 信頼感の類型とその発達の変容—高校生を中心に— 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 493.
- 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, 29, 130-134.
- 天貝由美子・杉原一昭 1997 中・高校生の学校適応感と信頼感との関係 筑波大学心理学研究, 19, 1-5.
- 天貝由美子 1997a 成人期から老年期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響— 教育心理学研究, 45, 79-86.
- 天貝由美子 1997b Self-esteemを規定する要因としての信頼感—その生涯発達の变化— カウンセリング研究, 30, 103-111.
- 天貝由美子 1999 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因 教育心理学研究, 47, 229-238.
- 天貝由美子 2001 信頼感の発達心理学 新曜社
- Cohen, S., & Wills, T.A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. Psychological Bulletin, 98, 310-357.
- Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. Int.Univ.Press, New York (小此木啓吾編訳 1973 自我同一性 誠信書房)
- 蒲田いずみ・渡辺弥生 1994 中学生の不登校児のソーシャルサポートに関する研究 I 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 501.
- Kaplan, R.M. 1973 Components of trust; note on use of Rotter's scale Psychological Reports, 33, 13-14.
- 河合隼雄 1999 「文化の病」としての不登校 河合隼雄編 不登校 金剛出版, 13-24.
- 内藤勇次 浅川潔司 高瀬克義 古川雅文 小泉令三 1987 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145.
- 岡安孝弘 嶋田洋徳 坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- Rotemberg, K.J. 1990 The measure of the trust beliefs of elderly individuals. International Journal of Aging and Development, 30, 141-152.
- Rotter, J.B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. Journal of Personality, 35, 1-7.
- Rotter, J.B. 1971 Generalized expectancies for interpersonal trust. American Psychologist, 26, 443-452.
- 嶋 信宏 1990 ソーシャルサポート研究の現状と臨床場面への応用 東京大学教育学部心理教育相談室紀要 12, 63-72.
- 杉原一昭・天貝由美子 1996 特性的および類型的観点からみた信頼感の発達 筑波大学心理学研究, 18, 129-133.
- 鑓幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社 現代新書
- 渡辺弥生・蒲田いずみ 1997 ソーシャルサポートについての登校児と不登校児の比較 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 235.

謝辞

本研究をまとめるにあたって、岐阜大学教育学部学校教育講座の心理学研究室の先生方にお世話になり、心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

また、調査に協力してくださった被験者の皆さんに感謝いたします。